

## 『地方創生』に向けた 札幌大学のチャレンジ

Vol.2『みらい志向』で進める、あたらしい教育プログラム



札幌大学  
学長 大森 義行 氏

### 《札幌大学は1967年創立。2022年に創立55周年を迎えた》

札幌大学は、開学から半世紀余り、一貫して北海道の経済界、地域社会で活躍する6万3,000人以上の人材を輩出してきております。

本学の創立当時、北海道は開拓から100年という節目を迎え、社会基盤の整備を進める「開発」が地域経済をけん引する時代でした。このような中で、経営・経済や外国語の知識を備えた人材を輩出する教育の理念として、いかなる困難も乗り越えて自らの将来を拓いていくという揺るがぬ意思を持った先人たちに習い、「生气あふれる開拓者精神」を建学の精神に掲げました。

今、私たちは急速な人口減少や少子高齢化、飛躍的な技術革新の進展、さらには激しさを増す気象変動やパンデミックによる計り知れない影響が加わるなかで、先人たちのように未来を信じ、困難に立ち向かっていかなければなりません。こうした先の見えない未知の時空間「みらいフロンティア」を切り開いていくための恐れのない、あきらめない強い思いとしなやかな心身、それが現代の「開拓者精神」と捉えています。

そして「生气」とは、いきいきとした気力、活力、生命力であり、これこそが困難を乗り越えていくため

の原動力、エネルギーの源です。

こうした「生气あふれる開拓者精神」を備え、知識と経験を身につけた人材を輩出していくことが、将来にわたる本学の使命であると考えております。

### 《学部の枠を取り払った先進的な1学群制度》

本学では2013年に、急激に変化する社会環境や学生の多様化に対応するため、これまでの5学部6学科を地域共創学群として1学群化し、その下に13専攻を設け多様な学びを提供することとしました。この改革は、大学が一体となり、学生が主体的に学ぶことのできる環境を整え、他者と協働しながら地域の発展・創造を支えてゆく人材を養成することを目指すものでした。

さらに、高校生からのニーズや特色ある教育の展開などを勘案し、2020年度からは9専攻に再編しました。

### 《「活きた学び」を身につける》

本学では、座学だけではない「活きた学び」を実現するために、学生が自ら能動的に学びに向かうよう設計されたアクティブラーニングを導入した授業を行っています。

#### 1 キャリアデザイン

キャリア教育科目は、1年生の春学期から4年生の秋学期まで全8科目が配置されています。特に1年生800名が履修するキャリアデザインⅠは10クラス展開とし、サブ講師を含め4名の専門スタッフが授業運営に関わっています。シラバスも講師も一切外注せず、全て本学のオリジナルプログラムです。

#### 2 アクティブ・プログラム

アクティブ・プログラムは、実践的・体験型の活動を主軸に据えており、どの専攻に所属しているかに関わらず全ての学生が参加できる学びの場としてスタートしました。2020年度には「地域」「ビジネス」「語学」

など5つの分野で22のプログラムが提示されておりました。

本プログラムは札幌大学での学びを「深める」役割を担うもので、専攻ごとに掲げられている教育目標・到達目標をさらに強化あるいは補完するため、理論と実践の往還で社会に通用する力を身に着ける学びの一つとして位置づけられています。

### ≪「みらい志向プログラム」の開始≫

従来、専攻における教育は一つの専門性を深化することに特化してきました。しかし、これでは学生の多様なニーズに応えることができません。そこで本学が導入した学群制のメリットを最大限に生かし、専攻をまたぐ学び(ヨコの学び)ができるようにしました。「経済を専攻しながらスポーツ文化、あるいは、リベラルアーツの講義も履修する」など、学群制のメリットを最大限に生かし、学生の多様な興味関心に応じ、自由に学びを組み合わせることで学ぶことができることにあります。しかし、先を見通さずに科目を選択すると目標が見えなくなるので、目的を明確にしてカリキュラムマップを作成し、さまざまな仕上がり像を明示した「みらい志向プログラム」を導入することにしました。

本年度から3つのプログラムが開始されています。

#### 1 データ・サイエンス<sup>さきがけ</sup>「魁」プログラム

現在、日本および世界は第4次産業革命の只中であり、その担い手はデータ・サイエンスやAIです。本プログラムでは、ビジネス課題や社会的問題の解決に必要なデータを収集し、活用あるいは伝達するための、ICT、プログラミング、統計学、機械学習などの知識・技能を修得した人材を育成することを目的としています。

ビジネス課題を発見・把握・整理したり、その解決案を創造し実践するために、データ・サイエンスプログラムでは個別的なデータ・サイエンスの手法の学修にとどまらず、同時に経営学の基礎も学び、ビジネス

課題の本質を捉える能力を身につけています。また、本学と企業との太いパイプを活かし、企業内での具体的な課題を教材として取り上げ、理論と実践の両面から相乗的な学修を積み上げていきます。

具体的な人材育成イメージは次のようになります。

- ① データ・サイエンスに関する知識・技能を修得し、ビジネス課題に対してデータに基づいた解決法を提案できる者。
- ② 複合的・輻輳<sup>ふくそう</sup>的なビジネス事象に対して、観測されるデータの中から<sup>すうよう</sup>必要なデータを発見でき、事象に対する新たな知見を創造しうる者。
- ③ データ・サイエンスの知識・技能の活用によって明らかとした知見を社会や企業にわかりやすく伝達することができる者。



データ・サイエンス「魁」プログラム  
「人工知能概論」の授業の様子

#### 2 ビジネス創生「食・観光」プログラム

現在、北海道が戦略的産業に位置づける「食」と「観光」について、ステークホルダーとの協働ができ、かつ専門的な知識・経験を有する人材、また北海道が推進するアウトドア・ネイチャーガイド等の有資格者の養成が求められています。北海道経済の再生・活性化に貢献できる若手人材の育成を目的とします。

北海道の「食」や「観光」に関する専門的な知識を修得するだけでなく、ツーリズムの現場・現地での実習や観光業界の実務(インターンシップ等)を経験することで、観光業界や地域が抱える諸課題を把握・分析し、持続可能な社会経済の実現に寄与する人材を目指します。



ビジネス創生「食・観光」プログラム  
「食と観光入門」授業の様子

### 3 アイヌ文化スペシャリスト養成プログラム「asir（アシリ）」

民族共生象徴空間ウポポイが2020年に開業した影響もあり、日本の先住民族であるアイヌの歴史や文化に社会的関心が寄せられています。しかし、主として明治以降の同化政策により、少なからぬアイヌが自らの民族的アイデンティティを否定し、アイヌ文化から目を背けるような状況が続いてきました。アイヌ文化を復興し、アイヌ文化に関する社会的理解を促進するために担い手の育成が最重要課題とされています。

本プログラムでは、アイヌ文化の基本的知識の習得とともに、木彫工芸・布工芸・PCを利用したアイヌデザインなどの実技演習も組み込むことにより伝統工芸伝承者の育成にも資するものとします。

具体的な人材育成イメージですが、アイヌ民族の歴史や文化に関する専門的な知識（歴史・文化）や技術（工芸・芸能）、産業化のためのスキルを習得するとともに、アイヌコミュニティおよび各地の自治体の現状や抱えている課題についても把握することで、北海道における新たなアイヌ文化創出に寄与する人材を目指すことを目指しています。



アイヌ文化スペシャリスト養成プログラム「asir（アシリ）」の「アイヌ工芸（木彫）」の授業の様子

「みらい志向プログラム」は専攻分野を問わず、特定のテーマを追求できるシステムです。専攻分野を補強、応用する分野を学ぶ、第二の強みをつくるため新たな分野に挑戦する…など、さまざまな活用法が考えられます。なお、在学中に修了必要単位数を修得し申請すると修了が認定され、卒業時に修了証明書が発行されます。

### 《多様な地域との連携を通じた人材育成》

本学では今年から「地域連携センター」を設け、道内の多様な地域と連携事業を展開しています。先月号で紹介した「むかわ町・鶴川高校」との取り組みは、高校が実施する探究学習のプロセスに大学生と地域住民が関わり人材循環を図るものです。今まで高校と地域、大学と地域といったつながりは個々にはありましたが高校・大学・地域の3者が一体となり、合意形成をして継続的に取り組むのは初めてと思います。

大学生には、地域に入り高校生と一緒に地域課題解決の面白さを知ってもらい、社会人になった時に、当該地域での就職や起業なども選択肢の一つとして考えてもらう。高校生には、地域の課題を把握した上で進学し、大学での学びを通じ地域の理解を深める。そして学んだ知識を持って地域に戻る。地方と都市部の人の循環を生み出すことがこの取り組みの狙いです。

このような『札幌大学モデル』が他の大学や他の地方に広がり、人の循環の流れが大きくなうねりになって、北海道全体が活性化することを期待しています。

美幌町では、「エデュケーションプログラム」と「インターンシッププログラム」を美幌町活性化プロジェクト実行委員会とともに実施しました。前者は美幌町にあるスケートボード施設を使い、町内の子どもにスケートボードの滑走技術の指導等を行う取り組みで、後者は短期インターンシップの枠組を使い、美幌町内の企業での就業体験のほか、美幌町を感じる体験ツアーや意見交換を行うものでした。



美幌町でのインターンシップ

一方、大学間連携でも新しい連携に取り組みました。松本大学と鹿児島国際大学、本学との三者で包括連携協定を締結し、日本の北と南、そして中央に位置する三大学で地方創生に関わる大学版日本縦断モデルとなる取り組みを進めています。本年度は松本大学を会場に三大学の学生20名が集い、学生交流課題研究会議を開催して「地域防災」をテーマに活発な議論を行いました。

松本で開催した三大学交流  
課題研究会議の様子

### 《「HOKKAIDOハイスクールQUEST」の取り組み》

本学では、高校生が日々取り組んでいる探究学習の成果を広く社会にアピールする機会を創りました。高校生の能動的な「探究学習」をサポートすることが、大学での学びに接続すると考えているからです。

「HOKKAIDOハイスクールQUEST」と名付けた発表会で、今年は4つの高校から9つの発表がありました。この発表会ではプレゼンテーションの採点や順位づけは行わず、すべてのチームに「ゲスト」から次の活動に繋がる「フィードバックコメント」をいただく

ものです。この「フィードバック」を通じて、高校生のさらなる知的探求深化やスキルアップを促します。

また、高校教員を対象にしたセミナーも実施しました。「探究学習」に今後力を入れていきたい教員の方々を対象に、情報交換や先進事例を紹介し、現場の教員の方々が職場に持ち帰って役に立つ、エールを送るような内容でした。特に「教科中心主義」に悩まされている教員の方々の背中を押し、探究学習を進めることに希望を持てるものであったと考えています。

### 《札幌大学はどのような人材を育成し、どのような大学を創り上げていくか?》

大学への「社会的な要請」とは、学生の可能性を伸ばし、社会において活躍できる有為な人材を育成して送り出すことだと考えています。多様化によって入学してくる学生は学力のバラツキが大きく、学生一人ひとりの状況に合わせたキメの細かな教育を提供することを目指していきます。そして、学生たちが自ら学ぶ喜びを味わえる、もっと学びたい気持ちが沸き起こるような教育プログラムを展開したいと考えております。

現代社会は「VUCA（ブーカ）の時代」と呼ばれるように、変化が激しく、5年後10年後の先行きが見え難い時代になっています。このような時代を生き抜くには、これまでのように「知識を得る」だけでなく、「正解のない課題」について考え続けることで「活きた学び」を身につけることが求められます。そのために本学では学生たちの「試行錯誤」を歓迎し、間違いを恐れず、主体的に学び続け地域の課題に挑む人材の育成を目指します。

そのために本学では、「アクティブ・プログラム」や「みらい志向プログラム」などを通じ、就業を目指す専門性の習得だけでなく、変化の激しい社会を生き抜く力を身につける教育を行っていきます。

そして、最終的には、学生が「札幌大学に来てよかった」、「札幌大学で学んでよかった」と言われるような大学を創り上げたいと考えています。